

複数ルーツを持つ子供が生きやすい世の中へ

～総合の時間でグローバル教育を図る～

【活動目的】

グローバル化が求められるにも関わらず、日本では「日本人」か「外国人」の二元論的な考え方が広まっている。実際はこの2つに区分されない日本以外にも複数のルーツを持つ人や、両親は外国人だが自分は日本生まれ日本育ちといった「血筋」とは異なる日本のルーツを持つ人など多様な人々が存在する。彼ら彼女らは「単一民族」的感覚を持つ日本社会において“マイノリティ”であり、社会から偏見や差別を受ける対象になることが多い。私たちはここに問題意識を持ち、「複数ルーツを持つ子供」に焦点を当てた研究を計画した。なぜならこのような見方が構築されるのは教育課程に原因があり、また改善の余地も残されていると考えたからである。本研究では、教育現場の声を聞き、教育改善を促すだけでなく、学校というミクロな視点から社会構造を掴み、最終的に多文化共生社会に提言し、本研究が問題解決の一助になることを目的とする。

【活動内容】

はじめに新型コロナウイルス感染拡大に配慮するため、マスク着用、アルコール消毒、検温の実施など十分に対策を行ったうえでフィールドワークを実施した。1つ目のアプローチとして生徒の半数以上が外国にルーツを持つ横浜市立飯田北いちょう小学校へコンタクトを取り、アンケートを作成し回答をいただいた。2つ目のアプローチとして大阪でのフィールドワークを実施した。「在日コリアン」に目を向け、彼ら彼女らが多く集まり、様々な差別や偏見と闘ってきた歴史がある地域での調査を計画した。公立の小学校や中学校での総合に関する調査、民族学級の見学、教師・生徒・保護者へのインタビュー、大阪市教育委員会への調査を実施した。

【結論】

今回、本研究を通して、教育現場においてのマイノリティとマジョリティの両側面から検討を行ってきた。教育現場で養える力の可能性を感じ教育環境の改善

Web用要旨（サマリー） 2 / 2

を促進すると同時に、子供だけにアプローチするのではなく、多文化共生社会に適応できないマジョリティに、意識や行動を改めてもらうことが必要だ。人々の多様性に共感的理解を示し、受け入れ共生していくことが多文化共生社会には求められている。コロナ禍で海外に出ることが難しい現在、「世界で活躍できる日本人」を育成することも大切だが、「国内の多文化共生」に目を向けることが重要なのではないだろうか。マジョリティ、マイノリティの子供どちらとも常に「自分らしさ」を模索し、自分とは違っていても多様性を承認し合うという姿勢が必要である。”日本人”概念を捨て国籍や民族で括るのではなく自分と相手、人と人という単位を大切にしていってほしい。